令和六年度

# 「家庭の日」の作文作品集

・・・毎月第3日曜日は「家庭の日」・・・
「家庭の日」をきっかけに、家族相互の愛情と思いやりの心に満ちた明るい家庭を築くよう努めましょう。

# もくじ

優秀賞（四点）


ぼくの父ちゃん　神科小学校　四年　翠川（みどりかわ）　柊吾（しゅうご）　2

家族へ　菅平中学校　一年　矢口（やぐち）　ゆりな　3

家族をつなぐ大切な言葉　第五中学校　二年　伊東（いとう）　ほの香（か）　4

自分ではなく誰かのために　第四中学校　三年　藤升（ふじます）　結香（ゆか）　5

優良賞受賞者一覧……6

# ぼくの父ちゃん

神科小学校　四年　翠川（みどりかわ）　柊吾（しゅうご）

ぼくの父ちゃんは、おこるとこわいです。でも、やさしい所もたくさんあります。色々な所につれて行ってくれたり、習い事の送り迎えもしてくれます。

ぼくは、スイミングと、すもうと、ボクシングと、じゅう道をがんばっています。父ちゃんとは、ボクシングをいっしょにやっています。練習をして、分からない事は教えてくれます。父ちゃんは毎回練習に行くと、いつも元プロボクサーと練習をします。やっぱり元プロボクサーのパンチは強いので、鼻血が出ます。でも何度うたれても、立ち向かっていくので、ゆう気があふれていて、すごいと思います。さい近は、うたれ強くなって、鼻血の出る回数が少なくなりました。

ぼくは、三月までレスリングを習っていました。父ちゃんもいっしょに、レスリングの練習をしてくれていました。なんと去年、レスリングの経験がないのに、長野県の大会に出ました。大会に出る前に、小諸商業高等学校と佐久平総合技術高等学校へ、出げいこに行きました。そこでは、お兄ちゃんやお姉ちゃん達が、たくさんいました。じゅんび体そうからいっしょにやって、スパーリングをしました。父ちゃんは、高校のお兄ちゃんと本気で戦って、技を教えてもらいました。何度も何度も練習しました。しあいけっ果は負けちゃったけど、みんなが父ちゃんの試合に感動をして、おうえんしてくれました。ちょう戦をした父ちゃんは、本当にすごいパワフルなスーパー父ちゃんです。ぼくは、そんなすごい父ちゃんが大好きで、自まんの父ちゃんです。

父ちゃんのすごい所は、まだ他にもあります。料理が上手です。ぼくが、父ちゃんの料理で一番大好きな物は、たくさんあってなやんだけど、その中で天ぷらと、ギョーザがうますぎて、一番を決められませんでした。

天ぷらは、衣と、あげぐあいが最高にうまくて、いくらでも食べられます。ギョーザは、ニラがたくさん入っていて、ジューシーな肉汁たっぷりで、これもいくらでも食べられるうまさです。

「父ちゃんおいしい料理をいつもありがとう。」

父ちゃんと、ぼくの共通のしゅみは、車が好きな事です。ぼくは、スーパーカーが大好きです。その中でも、フェラーリが二人共好きだけど、高くてとても買えません。でも一生に一度は、乗ってみたいです。そのためにぼくは、がんばってお金をかせげる大人になりたいです。何の仕事で、かせぐかは、これからじっくり考えます。父ちゃんには、好きな車を買ってあげられるまで、元気でいてほしいので、これからも一緒に体をきたえていこうね。

「父ちゃん長生きしてね。」

（寸評）

初めてのことでも挑戦を続けていく「パワフル・スーパー父ちゃん。」柊吾さんが心底尊敬するのは、自分と一緒になって歩み続けていくその姿に対してでしょう。レスリングや料理と多彩な才能は、一方でスーパーカーへの憧れへとつながって行きます。まさに「一流を目指すものは一流に憧れる」ということでしょう。でも柊吾さんは地に足をつけた堅実な生活をしていこうとしています。お父さんの後ろ姿が生き方のバロメーターなのだなと感心しました。

## 家族へ

菅平中学校　一年　矢口（やぐち）　ゆりな

私の家には、母、兄二人、祖父母、叔父二人と私を合わせて計八人が住んでいます。母は、シングルマザーでいろいろと大変だと思うのに高校生の兄二人と私をここまで育ててくれました。私の家族は、家にいる時間がみんな違っていて会うことが少ないけれど、夜ごはんだけはみんなで集まって食べます。夜ごはんのときがいわゆる、家族団欒の時間となります。その時間は、みんなで最近あったことや、最近おもしろかったことなどを話せるので、私は夜ごはんの時間が大好きです。

兄とは、今まではけんかばっかりだったけど、お互い”大人“になって、今は落ちついています。しかし、中学生という時期は反抗期がやってきます。私は家族に反抗はしたくないので、きてほしくありません。でも、きっときます。私の場合、反抗してる瞬間は止められないけど、少し後に一人で反省会をします。つい先日、私のミスで母に注意されただけでかっとなって、反抗的な態度をとってしまいました。でも、すぐに自分が悪いと気づくことができました。そのときに謝れればよかったなと反省しています。それも成長の一つなので、家族は受け入れてくれると信じてます。

私がどんな道を選んでも家族の誰もが反対することなく、いつも私の背中を押してくれます。家に帰ってくると、絶対に誰かが「おかえり」と言ってくれます。その言葉を聞くといつも帰ってきてよかったなぁと思います。支えてくれている家族に伝えたい言葉、それは、「いつもありがとう」です。

（寸評）

大好きな家族に反抗してしまう、中学生という時期の「反抗期」は来てほしくないと思っている筆者だが、それでも反抗してしまう自分を受け入れて、支えてくれている家族への感謝の気持ちが素直に表れています。「おかえり」という言葉に心を和ませている姿が目に浮かびます。

# 家族をつなぐ大切な言葉

第五中学校　二年　伊東（いとう）　ほの香（か）

「私にお任せあれ」我が家の掛け声だ。とっても威勢のいい言葉。私はとても気に入っている。なんだかちょっぴり大人になった感じが好きだ。この言葉は祖母がよく使っていた。私たちがうまくいかなくて困っていると祖母が「私にお任せあれ」とピンチヒッターとして助けてくれた。ある時、祖母にこの言葉の力強さが好きだと話してみた。この年になってもまだまだ自信をもって「任せて」とは言えないけど、祖父が家族のためにやってくれたように今度は自分ができる事を少しでも増やしていきたいと常に思っていると話してくれた。その祖父も数年前に亡くなった。家事全般を困ったときによく手伝ってくれた祖父だった。祖母が体調を崩したとき子供の世話から炊事洗濯をしてくれたとき、とっても助かったし、男性の仕事、女性の仕事と決めつけずやってくれた祖父が大好きだと話してくれた祖母の顔が忘れられなかった。

ある日の夕方、母が仕事から帰宅をし急ぎで夕食を作りはじめた。時間もかなり遅くなっていてかなりバタバタしていた。私は母に何か手伝えることがあるかと聞いてみた。嬉しそうに「みそ汁作れるかい。」私はこの時を待ってた。「私にお任せあれ」やっと言えた。具材も全て私にお任せ。実はあまり料理経験もなく不安だったけど、チャレンジしてみた。完璧な出来栄えとはいえないけど皆に喜んでもらえた。この日が我が家の「私にお任せあれ」記念日のはじまりとなった。それ以来、家族の雰囲気が変わったように感じた。父が、兄が、そして、私も変わりたいと思った。これは誰かの役割とか決めつけず誰もが何でも出来るようになれば、困ってどうにもならないとき頼める家族がいると思っただけで気持ちが楽になるんだと。「良い事はすぐに実践してみる」が我が家の良い所。それぞれ皆が普段やっている仕事の手順などを見て覚えようとした。ずっと一緒に暮らしているのにはじめて知る事が多かった。

父が笑い、母も笑う。つられて私たちも笑った私の家族。これから先もずっと続くよう、私たち家族は助け合い、心の支えになる存在でいる事。祖父母が大切な人のために続けてきた思いを忘れず自分に出来ることを増やしていきたい。これまで頼りきりだった父も、今では料理のレパートリーも増え腕を上げた。兄は洗濯物をたたんだ。とっても綺麗な仕上がりにビックリした。二人ともなかなか器用だ。そして母ももっと笑顔になった。私は今とっても幸せだと感じている。

待ってました。「私にお任せあれ」兄と声が揃った。皆で笑った。

「私にお任せあれ」は私たち家族をつなぐ大切な言葉。

（寸評）

亡くなった祖父は、男性の仕事、女性の仕事と決めつけず、困った時家事全般をよく手伝ってくれました。その気持ちを受け継ぎ祖母は「私にお任せあれ」と家族のピンチを救ってくれています。祖母の思いが強く心に残った筆者は、ついにこの「私にお任せあれ」を言う時を迎えます。その後この言葉が家族をつなぐ大切な言葉になりました。父や兄が変わり、家族の笑顔が増えている様子を会話文や具体例をあげて書いているので、助け合っている家族の様子が良く伝わってきます。

# 自分ではなく誰かのために

第四中学校　三年　藤升（ふじます）　結香（ゆか）

私は絵を描くのが好きだ。筆を動かせば命が宿る。小さな世界が生まれる。作品が完成した時の達成感は言葉では表せない。

私がまだ幼かった頃、よく祖父の家に遊びに行っていた。私は祖父から絵の具を借り、絵を描いていた。その影響か私はいつの間にか絵を描くのが好きになっていた。

祖父は趣味で主に油絵を描いていて、数年前は個展も開いていた。私は独特なタッチで描かれている絵も、絵を描くのが好きな祖父も大好きだった。

私は今、美術部に入っている。けれど中学三年になり、部長になったのにも関わらず、私は描きたいものを見失ってしまった。後輩達が私以上の画力を持ち、賞を取り、結果を出していることに気付いたからだ。筆を持つ気力もなくなり、スランプに陥ってしまった。

そんな時、部活内で美術展に出展する期日が迫っていた。さすがに出展しないわけにもいかず、気が乗らない中なんとか制作した。そして納得のできない状態で出展した。こんなものでいいのか、と私は何度も自分に聞いた。

美術展が開かれ、私は母と向かった。祖父は足が弱く来れなかったので、母は私の絵の写真を撮り、後日祖父に見せることになった。母は私の絵をほめてくれたが、私はその言葉に喜べなかった。

そして数日後、私は撮ってもらった絵を祖父に見せた。アドバイスをくれたが、私は上の空の返事をし、聞き流してしまった。すると祖父は絵を描いている部屋に私を呼んだ。

「結香に最後の絵を見せようと思って。」

祖父は何気ない顔で言った。「最後」という言葉に戸惑う私を横に、祖父は一枚の絵を見せてくれた。

それは優しい雰囲気をまとう人の横顔だった。点描で描かれ、色の移り変わりがとても綺麗だった。そして祖父は

「俺が死んだら、この絵に取りついて、結香のことを見守ってるよ。」

と冗談混じりで、けれどどこか寂しく言った。

その瞬間、ドクンと胸が鳴った。祖父は自分がいなくなっても誰かを安心させるために「最後の絵」を描いたと私は気付いたからだ。自分のためではなく、誰かのために描く。祖父の絵に対する「本気」が伝わった。そして私の中に「絵が描きたい！」という気持ちが生まれた。

私も祖父も絵を描くのが好きだ。けれど私達の方向性には大きな違いがあることに気付いた。私は「自分のために」、祖父は「誰かのために」絵を描いているのだ。祖父の絵は誰かの心を支える力を持っている。なんて素晴らしいことだろう。私も祖父のように誰かの心を支えられるようになりたい。

その第一歩として、新しい夢を抱かせてくれた祖父に「ありがとう」の気持ちを込めた絵を描き、渡したい。祖父の心を支えるために、「本気」で絵と向き合っていきたい。

（寸評）

祖父の影響で絵を描くことが好きになった筆者は、美術部で部長を務めるも、描きたいものを見失っていました。気乗りしない作品を美術展に出展し、その絵の写真を祖父にみてもらいます。祖父の部屋で（祖父が描いた）「最後の絵」を見せられ、絵に込めた思いを知ったことで、作者は何のために描くべきかに気づきました。

祖父の「最後の絵」に対する思いが、筆者の心に響き、描画への迷いを払拭。家族のつながりが心の変化として描かれた作品です。

## 優良賞（十一点）

わたしのかていの日……神科小学校　一年　土野（つちの）　月光空（るあら）

心のなかは…いつもありがとう……丸子中央小学校　五年　櫻井（さくらい）　響（ひびき）

大好きなお手伝い……神科小学校　六年　清水（しみず）　奈菜（なな）

父から学んだこと……第六中学校　一年　上原（うえはら）　愛莉（あいり）

おじいちゃんへ……塩田中学校　一年　加藤（かとう）　燈里（あかり）

注意の中の優しさ……第五中学校　一年　峰村（みねむら）　結花（ゆいか）

ずっと元気でいてね……第六中学校　二年　槇原（まきはら）　万桜（まお）

家族のありがたさ……塩田中学校　二年　相田（あいだ）　莉子（りこ）

「ありがとう」を伝えたい……塩田中学校　二年　望月（もちづき）　紗名（さな）

当たり前じゃない「幸せ」……第六中学校　三年　小泉（こいずみ）　凜（りん）

祖母の口紅……第六中学校　三年　中山（なかやま）　真知子（まちこ）

上田市教育委員会